やまぼうし

第４号

2021年４月

陶磁研究やまぼうし会

YAMABOUSHI CERAMICS RESERCH SOCIETY

陶芸を嗜み、心豊かな日々を

人生１００年時代に入り、老若男女を問わず、人生において自分らしい自由な時間を持つことが欠かせないものとなっています。そのために、陶芸は無心になって創る喜び、分かち合う喜びを実感できる格好の活動と言えます。

当会は「社会貢献を目指しながらコミュニティー・ライフを楽しむ」ことを目的としています。約２１年前に、東京芸大公開講座（陶芸）の受講生が中心となって発足しました。その後２０１７年に組織改組の上、「陶磁研究 やまぼうし会」と改名して、芸大陶芸研究室の支援から巣立ち、一般任意団体としての独自の活動を始めました。しかし、今も公開講座の受講経験者が中核となって活動を支えていることは変わりません。つまり、陶芸の楽しさに目覚めた人々が、仲間とともに創作の喜びを深め、自己実現を図る場となっています。

現在、８６名の会員を擁し、「文京区社会関係団体」の指定を受け、湯島天満宮そばにある文京区区民施設のアカデミー湯島を拠点に活動しています。ここで、毎週金曜日の１０：００～１６：００に絵付け・焼成などの作陶に自由な雰囲気の中で取り組んでいます。過去３年間（２０１７年度～２０１９年度）は、恒例の会員による作品展をはじめ、技法講習会では芸大陶芸研究室関係者を講師に迎えて多様な絵付けを含む作陶等を楽しみました。文京区立湯島小学校での図工授業および特別支援学級のお手伝いも始めています。また、２０１９年秋には、丹波立杭焼の郷と、神戸市にある竹中大工道具館を１泊２日で訪問しました。

残念ながら、２０２０年度はコロナ禍のため、企画した技法講習会は規模の縮小、あるいは、中止・無期延期を余儀なくされました。秋に予定した金沢観光と人間国宝 吉田美統先生訪問旅行も中止になり、湯島小学校での授業のお手伝いも自粛しました。それでも、毎月１回程度で「天神陶塾」が立ち上がり、人間国宝 藤本能道先生の高弟でいらっしゃる橋詰正英先生のご指導をいただくことになったのは幸運でした。この冊子をご覧いただければ、コロナ禍の困難な中でも、会員が生き生きと活動している様子が伝わってくるはずです。平穏な日常が一日も早く戻ることを祈りつつ、知恵を絞り、２０２１年度も充実した企画を実施して参ります。このようなときだからこそ、陶芸を通して新たな喜びを見出し、皆様と満ち足りた時間を過ごしていきましょう。

陶磁研究やまぼうし会　　会長　落合卓四郎

前田正博　先生　作品

佐伯守美　先生　作品

豊福　誠　先生　作品

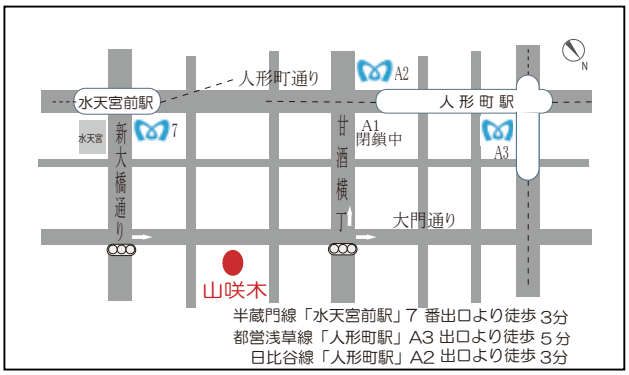
三上　亮　先生　作品

日本の工芸作家を中心に若手俊英作家からベテラン人気作家まで、工芸の世界の第一線で活躍する作家の個展、グループ展を中心に展開しております。また催事期間以外の常設展示では、東京藝術大学を卒業された旬な作家を中心に揃え展示をしております。作家物の作品を観て触れて「たなごころ」を存分にお楽しみ下さい。

ギラリー山咲木・山﨑哲也

ギャラリー山咲木

〒103-0013 東京都中央区
日本橋人形町 2-16-2 ユウビル１階
TEL 03-6661-6865
http://www.g-yamasaki.jp
FAX 03-6661-6896
〈展示会会期中の営業時間〉11:00 ～ 18:00
＊会期中は無休　会期前後日休み
〈展示会以外の営業時間〉11:00 ～ 18:00
＊展示会以外は、日・月曜日休み（臨時休業あり）



第１回 技法講習会　「釉 描 加 彩」

2020 年 7 月 4 日・18 日　　講師　橋詰 正英 先生
中野 ZERO 陶芸室

三十年程前に住んでいたアメリカで、藤本能道氏が特集された雑誌に出会いました。その頃私は Mayco 社の絵具でポップな絵付けを楽しんでいましたが、180 度違う墨絵の様な抒情的な作品にえーっこんな表現もあるのか！とまさにビビビ の衝撃で、憧憬はずっと続いているのです。

その釉描技法を受け継がれた内弟子のお一人、橋詰正英先生が、お得意の自然描写の中でも極め付けのフクロウの絵を模写させてくださる 由、万難を排して、いの一番に申し込ませていただきました。

緊急事態宣言が明けてほぼ１ヶ月。こもどもの思いで参加されたと思います。周到に感染対策を準備いただいたおかげで、皆、堰を切ったように、時に先生の説明に先駆けて、カンカンガクガク、創作の意欲に元気づけられました。

ここから真骨頂です。フクロウの大事な特徴と絵具の説明の後に実演です。へーっ、輪郭はそんなに細く黒く描くのですか。同じ下絵で微に入り細に入った説明を受けたのに、やっぱり生き物を描くのは面白いです､皆それぞれ個性的なフクロウになりました。コロナ禍の中で､目の前 30cm に集中する清々しさ、そんな時間を持てる幸せを感じる一日でした。

後日、先生が背景を吹き付けて還元焼成してくださった完成品にビックリ。線描き黒すぎで面は適当にペタペタ塗ったハズなのに２００％趣深く一変していました。先生の下絵やご指導と共に改めて下地や釉薬、焼成のおかげだと実感できました。先生の立派な素地にはまだ面映いフクロウなのでまた受講させていただきたいです。ありがとうございました。　　島　眞澄 記

第 2 回技法講習会「陶芸と異材料の新しい陶芸を学ぶ」

2021 年 1 月 16（土）17 日（日）　　講師 高岡 太郎　先生

アカデミー湯島

「新しい陶芸　異素材との出会い高岡先生の独創的な技法を学ぶ」

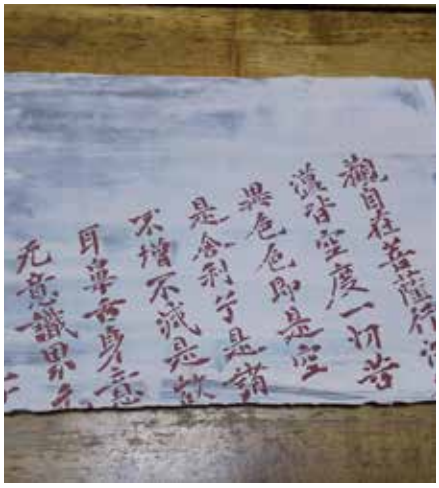
2021 年 1 月 16（土）17 日（日）に行われたこの講習会は、独創的な高岡先生の制作方法に触れる貴重な時間でした。

1 日目は先生の道具や加飾方法の紹介に始まり、午後は成形を終えた人から曲面に有効な薄い紙で作るステンシルシートを作成しました。文字の切り抜きはつなぎ目を計画して切り抜きます。
つなぎ目の確認をしようと先生の切り抜きを手に取ると、超絶技巧的切り抜きにしばし見惚れてしまいました。

2 日目はレクチャー後に各自の作品を加飾しました。「きっちり計画したものを仕上げるというよりも、描いたところから全体をイメージして線を加えたりする、その方が気が楽ですよね」と先生が言葉にしてくださったので楽しんで制作することができました。

色泥を塗り重ねたりスクラッチしたりステンシルシートで文字を加飾しながら、さらに高岡先生の世界を知りたくなった充実した 2 日間でした。

ありがとうございました。　　受講者数：12 名　　石井　有希子　記



第３回 技法講習会　「象嵌技法を学ぶ」

2021 年 3 月 20 日・４月４日　　講師　前沢　幸恵　先生
アカデミー湯島　　補佐　御手洗　真里 先生

三年前に前澤先生の個展で作品を拝見し、切子ガラスのように外側の模様が内側に浸透させてあり、どのように作られたか興味あり、知りたいとおもっておりました。今回、先生の講習会があり参加しました。

先生が成型して下さった鉢に、等分に籠目模様・麻の葉模様をマスキングテープを貼ります。テープにラテックスをつけながら貼りますが、貼るだけでも綺麗に貼れず時間がかかりました。その上に胎土を塗り、乾かして撥水剤・他、工程の多さに一つ一つが初めての体験でした。

ご指導の他に、事前に成型した鉢、シッタ、筆等の道具を準備ご用意していただき、前澤先生に大変感謝しております。　　伊藤　裕子　記

会長　　御手洗　先生　　前沢先生

麻ノ葉模様のテープ貼り

素 焼 き後

籠目模様の先生作品

麻ノ葉模様の先生作品

第４回　作品展

文京区シビックセンターアートセンター
2020.9.24 ～ 9.27

東京藝大名誉教授の島田文雄先生のお声がけで 20 数年前に始めた作陶グループを母体に、自主活動を展開する新たな歩みを始めて４年目となります。その活動はコロナ禍など多くのハードルを乗り越えて行われた事と思います。今回の作品展で、やきもの作りをこよなく愛する皆さんの作品に込めた情熱を感じ取っていただければ幸いです。

東京藝術大学　教授　豊福　誠

（教員表記は令和二年度時）

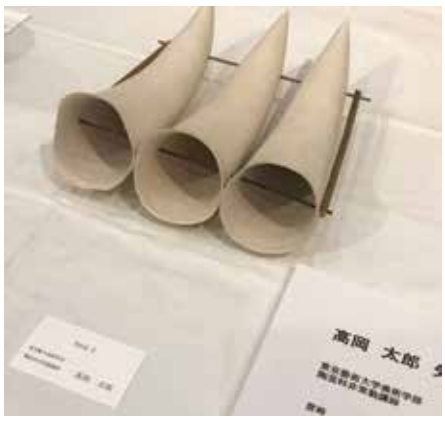
教授　豊福　誠

准教授　　三上　亮

教育研究助手　　中嶌　雄里

非常勤講師　茂田　真史

教育研究助手　　高橋　侑子



非常勤講師　　高岡　太郎

非常勤講師　　田中　隆史

非常勤講師　　佐々木 誉斗

非常勤講師　　奥田　康夫

教育研究助手　　苅込　華香

名誉教授　　島田　文雄

吉村　　計

廣田　弘子

海老名　志文

近藤　健

竹村　光子

末田　寛治

石川　久夫

北村　廣明

赤坂　延子

大出　ヒロ子

江原　英子

工藤　久仁子

根本　雅子

坂口　明美

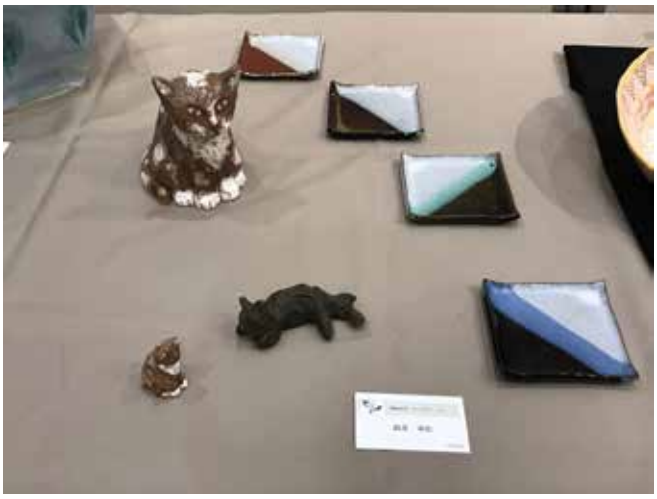
遠藤　成夫

落合　博子

戸松　令子

合田　隆治

長濱　善子



坂永　卓宏

落合卓四郎

加藤　史郎

荻須　謙二

鳴島　淳子

高野　静絵

小松　幹夫

茂貫　浩子

小椋　正

山中　峰雄

大熊　敏幸

豊福誠退任記念展　『色絵磁器』

東京藝術大学　大学美術館　陳列館

2020.11.23～12.6

東京藝術大学美術学部工芸科陶芸研究室の豊福教授は、1973 年の入学から 47 年間在籍して、学び、育て、研究し、制作してこられました。初期の色絵作品から「釉裏銀彩」まで、仕事が概観できるよう多彩な作品が展示されました。

お話しを伺いました。

Q：藝大の良さは？

自由で自分のやりたいと思ったことに没頭できる、そういう場所を提供する、あまりいろいろ言わないけれど、やる気のある人には答えてくれる、一生懸命な子には無理しても手を貸す、場を提供してあげる、・・・

Q：恵まれていたと思うこと

藤本先生、田村先生、浅野先生、3 人が同時に教授であった、その時代に学生としていて、先生に恵まれていた。とくに教わるということではないが、そばにいて実際の制作を手伝うことによって覚えることが沢山ある。一緒にやることが良いと思う人にはよいが、吸収できた。

Q：うれしかったこと、おもしろいと思うことは？

学校に行くのが楽しくてしようがなかった。浅野先生には、結局テクニック部分の授業を受けたのではなく、食べるものに対する情熱を通して学んだ。料理を食べたり作ったりすることで、焼物の器につながっていくという、体験的に学ぶ時間が大切だったと思う。

楽しいだけでなく、学生のことが気になってしようがない、通り一遍の授業ではなく一人一人の個性を見抜く、対応していく、大変なことだけどおもしろい。人を育てる大切さを実感しながら教育できる、藝大での教育のおもしろさ、やりがいがそこにある。

Q：制作への姿勢

新しさを求める姿勢も大切だが、過去に学び、知と技の蓄積を礎に新しさを見出す工芸の仕事に惹かれ、今日まで制作を続けてきた。これからも変わらぬ姿勢で続けていければと思っている。

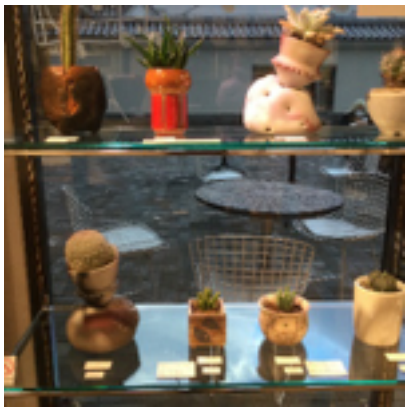
手から手へ　豊福誠教授退任記念

歴代教員による作品展　藝大アートプラザ

2020 年 11 月 20 日～ 12 月 13 日

「師の手の仕事は、それを学び合う仲間に受け継がれ、新たな作品を生み出します。手から手へ継承と展開の様相をご高覧ください。」

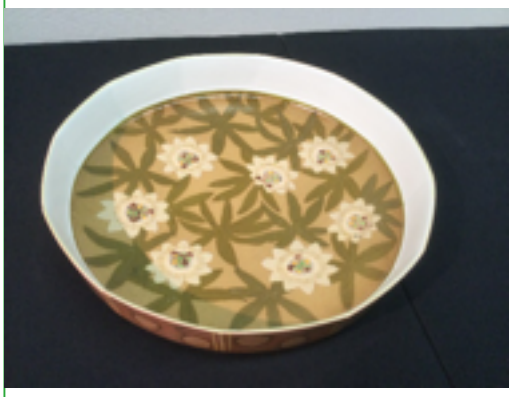
豊福先生率いる陶芸研究室の歴代講師・助手 31 名による展覧会。各作家の世界観が表れた作品群、作家が植栽を含めて作品として作った植木鉢・藝大植物園の出現、充実の展示内容でした。



豊福 誠展　　ギャラリー山咲木

12 月 16 日～ 23 日

「生涯初めて購入した作家モノのうつわが先生の飯碗でした。素朴で丈夫、飽きのこない不思議な存在感と使いやすさがあります。」と、店主の山﨑さんはいう。豊福教授の集大成となる作品の数々が展示されました。



豊福誠作陶展　東京藝術大学退任記念

日本橋三越本店美術特選画廊　　2021 年 2 月 17 日～ 22 日

「本展では豊福氏の東京藝術大学に脈々と受け継がれ積み重ねてきた王道とも呼ぶ本格的な色絵表現にこだわった壺、皿、鉢など優品の数々を展覧いたします。色絵磁器の世界をご高覧ください。」拝観、ご自分の色絵探しを続けていらした先生の近年の作品と新作を堪能しました。

Q：やまぼうし会へひと言

日本陶磁芸術学会の改編、立ち上げにつき、ご迷惑をお掛けしました。また、ご協力いただきました。学会も、やまぼうし会も、ともに良い会にしていければと思います。

やまぼうし会から謝意

先生の当会への長年に渡るご指導ご鞭撻に謝意を表するために、当会は役員一同で発起人会 (代表は会長) を発足させ、会員に協力を呼びかけました。55 名の会員が応募されました。三越での作品展会場に発起人有志で 2 月 20 日にお邪魔して、記念品の目録を贈呈しました。先生のますますのご活躍を当会は祈念しています。

はじめまして

准教授　椎名 勇

本年度より東京藝術大学陶芸研究室准教授に就任いたしました椎名勇と申します。神奈川県の川崎に生まれました。小学生の頃は近所にたくさんありました空き地で泥団子作りに熱中する少年でした。高校生になり大学受験をむかえても物作りへの関心は変わることなく芸大に入学し陶芸を専攻しました。当時の陶芸研究室には三浦小平二先生、島田文雄先生、豊福誠先生、助手の望月集先生、奥田武彦先生、迎泰夫先生、講師として佐伯守美先生がいらっしゃいました。

陶芸科に入りますと初めに土叩きをしました。先輩達が使わなくなったクズ土と呼ばれる粘土を木槌で叩き篩にかけ水と合わせて練り上げ、これから自分達が向き合っていく粘土を同級生みんなで作ります。粘土を作る工程の中で土は様々な表情を見せます。土の塊を木槌で割った断面の荒々しい土肌、篩にかけられ粉末になった土のフワッとした感触、そこに水が染み込み土と水が作る不思議な境界線やグラデーションなど、その後の土の表現につながるヒントにあふれていました。

金・白金彩線刻文鉢

粘土が出来上がると湯呑みをたくさん作ります。思い通りになってくれない粘土を相手に何度も繰り返しロクロの遠心力を使って粘土を捻り上げていきます。重力との戦いの第一歩です。ずっしりと重い初めて焼き上がった湯飲みにお茶を入れて飲んだ喜びは今も忘れません。このカリキュラムは少しずつ形を変えて今も続いています。器物の制作を通して生活を楽しく豊かにしてきた用の工芸、素材の特性と自分の伝えたい想いが重なって立ち上がる表現の工芸、多様化する工芸造形の魅力を伝えていけたらと考えております。
どうぞよろしくお願いいたします。

白金彩線刻文器

蓋付彩色器

線刻文陶筥

クジラ小皿

「bloom 展」を終えて

2020 年 9 月 22 日～ 9 月 27 日　桃 林 堂

この展示はコロナウイルスの影響により大幅に遅れての開催となり、予断を許さない世間の状況下で非常に心配でしたが、予想を超える多くの皆様にお越しいただき、大盛況となりました。
多くの方が作品を見てくれたこと、そして何よりも無事に展示を終えられたことに感謝いたします。
「今年に入り非日常が続く中で今展示も当初予定していた５月から延長となりましたが、それでもたくさんの方々が足を運んでくださったことを嬉しく思います。私は卒業後一旦制作から離れることを決めており、最後になるかもしれないことを含めても非常に大きな意味を持つ展示でした。おかげさまで素晴らしい展示となり、この展示に関わったすべての方に感謝申しあげます。作家として制作を続けていく同級生たちの元気な姿にも本当にたくさん勇気をもらいました。ありがとうございました。」清水咲季

この桃林堂の展示では、今年の３月に大学を修了し、この春から新しい環境で制作した作品をはじめてお披露目することができ大変嬉しく思っています。今後もより良い作品をお見せできるように精進してまいります。」寺倉京古

「こたびの同級生とのグループ展は私にとって特別な意味がありました。藝大で工芸を学んだ６年間の集大成として、在学中より気持ちを込めて準備してまいりました。新型コロナウイルスの影響で当初の予定より５ヶ月延期しての開催となりましたが、作陶に打ち込める期間が増えたことで、結果的には作品を進歩させるための重要な期間だったように思います。改めて、このような状況でも開催させてくださった桃林堂のみなさまに感謝申し上げると共に、一緒に乗り越えた同級生４人にも心から感謝しております。」河内理帆

「コロナの影響により開催が危ぶまれましたが９月に延期し無事会期を終えることができました。このような状況にも関わらず、予想を超える多くの方にお越しいただき本当にありがとうございました。同級生とは今回の展示で久々の再会となり、在学中より少し成長した姿や作品からも刺激を受けました。また、様々な世代や趣向のお客様とのお話しの中で新たに見えてくることも多く、これからの陶芸家生活に向けて大変良い経験となりました。またお客様との交流ができる日を楽しみにしております。ありがとうございました。」小田原唯

最後になりますが、展示にも多くお越しいただいたやまぼうし会の皆さまに感謝申し上げます。
これからも私たちの制作活動を暖かく見守って下さいますよう、今後もどうぞよろしくお願い致します。　　髙橋侑子

「天神陶塾」　　　　　　　　橋詰正英

春になり桜の咲く季節になりました。

3年前に青梅で私のお気に入りの幹の太さが、1ｍもある桜の木が道路にはみで出いる太い枝をバッサリ切られてしまいました。桜は切ってはいけない事になっているのでこれでこの大木も枯れてしまうのでは、と思っていました。次の年は、さすがに、花を咲かせませんでしたが、今年になり樹勢良く沢山の花をつけてくれました。コロナで経済的にも心の部分でも色々と痛めつけられてもう１年以上我慢の日々が続いています。

痛めつけられても花を咲かせ、春の便りを届けてくれる桜に勇気をもらい癒されています。

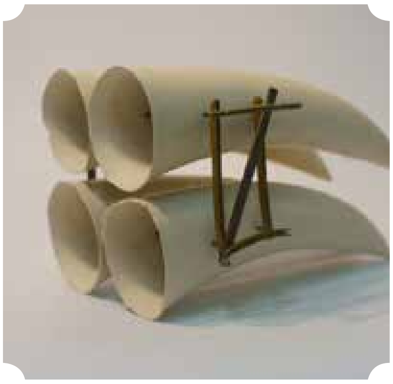
昨年の夏より落合会長に「天神陶塾」と名前を付けていただき月に一度の絵付けの講習会を行っています。コロナで休講になることが多く思うようにいきませんが、四季の心を大切に癒されれる様な作品を作ってもらいたいと思い毎回季節にあった原画を描きそれを写してもらいヒューステンの絵の具で絵を描いてもらっています。

かなり高度な技法をやってもらっているので難しいとは思いますが、失敗しても諦めない心で続けていれば必ず良い作品が出来上がると思いますので頑張って長く続けて欲しいと思います。

私も皆さんが楽しい時間が過ごせるよう努力してゆくつもりです。

私の制作観と素材　　　　　　　　高岡太郎

私が学生時に大学で学んだ土という素材と陶芸の技術は、私が作品制作する上で根幹となる要素ですが、同時に木材など他の素材も数多く作品に取り入れています。



それは表面的な理由からだけではなく、制作のプロセスも同時に表現に昇華させたいという私の制作動機からくるものです。

どのような表現メディアであれ素材から作品に至る過程で異なる物質に頼る瞬間があります。もっと具体的に言うと加工する道具や機械であり、移動、保管のための物も表現と素材に密接に関わり相互に作用し切り離せないものと考えています。

特に土という素材は産業として発展してきました。一つの陶器の作品が完成するまでには、多くの過程があり数多くの人が関わって成立します。

私は土を表現として扱うことは、それらの過程も作品表現に内包するべきと考えます。

現代の美術の分野では絵画、彫刻にならび「工芸」のカテゴリーの作家、作品が重要な位置を持つようになりました。ただ素材的、技術的な側面だけが注目されるようになっては、本来の作品性や作家性を見失ってしまうのではと私は危惧しています。私は素材が持っている力を信じていない訳では決してありませんが、作品表現する上では素材を使いながらも自分の意図と思想が埋没しないよう注意しなければいけません。

私は現在、土と道具の関係、作品と移動というテーマで作品表現することが多いですが、先日のやまぼうし会の講習会では微力ながらそのような部分を共有し伝えることができたかなと思っております。

作品制作について　　前沢幸恵

私は、土という素材を使い、いかに面白く、いかに見た事のない新しい表情を探し出せるかをコンセプトに制作しています。
私の作品技法「滲透彩磁」は、器の中と外の緑の模様が一対で全く同じになっています。しかし絵の具などで一体に見えるように描いたわけではありません。
素材は磁器で、外側の模様を、器自体を通過させて内側に浸透させ、全く同じ模様を浮かび上がらせています。
また、この滲透彩磁技法を始め、黒土に粒状の金の結晶が現われる「粒滲み染め黒金結晶彩」や、線象嵌から色味が滲み出す「線滲み染め青白釉彩」など、焼成により初めて表情が現れる作品をシリーズで制作しています。
私は、表現において、“現象”に対する興味がいつも根底にあります。
現象とは、素材が自分の手を離れて起こる予期しない表情が生まれる偶然性と、自らの手で起こさせる必然性があります。
自分の予期しない、予期できない新しい表情を求めて、常に土で実験を繰り返し、表情を探る偶然性。それを作品にしていく必然性。
この掛け合わせを主軸に作品を作っています。数多に広がる陶芸の表現技法の中で、まだ見た事のない独自の素材表現を求めて、日々制作しています。

滲透彩磁亀甲文様花器

粒滲み染め黒金彩水指

線滲み染め彩七宝文様壺

自己表現の成り立ち　　御手洗真理

私は東京芸大で陶芸を学び、自分の作品を制作するようになってから、主に鳥の羽をモチーフに作陶しています。
東京芸大の陶芸研究室では、轆轤などの技術向上をベースとして、様々な陶芸技法を学べる機会があり、各々研究する時間も与えられているので、私はそれらの習得や発見こそ、作陶において、自己表現の主軸になると考えていました。ただ、陶芸を学ぶにうちに、それらはあくまで技術に特化した工芸ならではの表現方法の１種であり、「発見や習得した技法をどう表現するか」より、自分の中では「土や釉薬を焼成して何が表現したいか」が大事だと感じるようになりました。
私が卒業制作から、何かのモチーフを表現しようとし始めたのは、土や釉薬に対して、造形での表現を試みたかったからだと思います。
様々なモチーフを候補にしましたが、「動きのある生物で、なおかつ自作の釉薬に合うディティールを造形に取り入れたい」という考えから、鳥の羽の作品が生まれました。
近年では羽のディティールだけでなく、鳥自体の動きを造形表現しようとした作品も制作しています。
自己表現としての試みは尽きないですが、成り立ちを振り返る良い機会になりました。

「開翼」

「soaring」3

唐津釉薬の作成（水上先生の講演を聞いて）　2020.10.04　山中峰雄

２０１９年の陶磁芸術教育学会の記念講演で水上先生より釉薬の話を聞かせて頂いた。

その講演の記憶をたどってみると、自然界での陶土のでき方から、窯業地に即した釉薬を作ることにより各窯業地独自の特徴のある製品を作り上げてきた。先生の話の中で古くからの窯業地では、陶土の採掘地と併せその地域の釜戸よりでた灰を使い陶土とあわせて特徴のある釉薬を製品に反映させ各地に製品を出荷してきた。

そこで、陶土と土灰をキーワードとして釉薬を試作してみようと考え、手元にある唐津陶土と手持ちの欅灰を使ってみることにした。唐津陶土は粒子の大きなものも入っているので水簸を行い粒子の細かいところを選んだ欅灰については、農家の屋敷林である欅の葉を燃やしたものを使いました。
灰は、水簸して燃え滓や沈殿物を除いてからあく抜きをしました。

唐津釉薬の調合　（本当に溶けるの？）

この疑問を解くためにテストピースを作ってみた。その結果、テストピース表面で唐津の土がガラス化したことを確認できた。色調は、唐津土や欅灰に含まれる鉄分による発色と思われる黄色ぽい色でガラス化した状態だった。

テストピース　テストピースの調合は乳鉢で磨ったので粒子が粗く表面形状が若干スムースではなかった。調合材料と比率

骨 材　：水簸した唐津土
灰　　：欅灰（落葉した欅の葉を燃やし水簸したものを使用）
調 合　唐津土 ６：欅灰 ４　調合割合は今までの経験により６：４で作った。
処 置　ミルで９０分　作品に塗布する釉薬については、自作のミルを使い釉薬 の常態を滑らかにした。

器の作成

赤土を使用（唐津陶土を使用したかったが手持ちがなくなり、早く結果を見たかった。）

器体　：輪花鉢・コーヒーカップ
施 釉 : 施釉方法はずぶ掛けで、厚めに掛けた。（理由：土灰を使った釉薬の灰成分は骨材に溶け込み厚みには大きく寄与しないと考えた。）
施釉後とテストピース
焼 成 焼成温度 :1230℃ (還元焼成)　焼成時間 :15 時間

試作結果

当初の目的である陶土は木灰（溶媒材）と混ぜることにより容易にガラス化することが確認できた。

今回幸運だったのは、今まで経験した調合比率を使い１回目のテストピースでガラス化を確認できたこと。このことにより、陶土と灰を混合することで釉薬として利用できることを経験できた。
また器体と釉薬との収縮率の違いによる貫入の発生や焼成後の器体のひび割れなどの発生が抑えられる。今回の結果より使い慣れた土を使い、木々の葉を燃やした灰を使い自分だけのオリジナル釉薬作成の可能性が手に入れられた。

藤本能道工房訪問記

初冬の一日青梅市梅里にある藤本能道先生の工房をお訪ねしました。
2019 年 12 月に新宿柿傳ギャラリーで開催された「藤本能道生誕 100 周年記念弟子一門展」でご説明をして下さった廣瀬義之先生が現在も藤本先生の工房を管理しながら作陶なさっていると知りました。是非遊びにいらっしゃいとお声を掛けて頂き今回の工房訪問が実現しました。

青梅駅からタクシーに乗り 10 分程で風情のある門構えの工房に着きました。
工房周辺は自然豊かな丘陵になっていて木々の紅葉が美しく近くに多摩川が有りセキレイの声も聞こえました。

ご門横の駐車場脇から上り坂の小道を行くと廣瀬先生が出迎えて下さいました。
庭には藤本先生や一門の方々の作品に登場した様々の花木が有りました。上野の芸大から種を頂いて蒔いたとご説明があった木は大木に育っていました。庭の右横には茶道教授をなさっておられる藤本先生の奥様がお住まいとの事でした。

工房には作陶場と窯場と作品や茶道のお道具の収蔵庫がありました。作陶場では質問にお答え下さり地釉の違いによる顔料の発色の違いを見るサンプル陶板や内弟子の方々の手作りのお道具類を見せていただきました。
壁際の棚には藤本先生が開発された梅白釉　霜白釉　雪白釉　新草白釉等ラベルが貼られた容器や顔料や原料の鉱物が整然と並んでいました。

藤本先生と言えば昭和天皇、皇后両陛下の茨城県への行幸の際菊池家での晩餐の為に菊池家からの特注でディナーセットを創られたことは皆様もご存じの事と思います。其時の食器制作に使われた石膏型が窯場に天井まで高く積み上げられていました。一夜限りの使用の為「幻のディナーセット」と言われているセットが確かにここで創られた事に感慨も一入でした。
2 年以上を要した制作には藤本先生の並々ならぬ情熱とそれをお支えした廣瀬先生はじめ藤本先生の元に集まった内弟子の方々のお力も大きかったのではないかと思いながら工房を後にしました。

廣瀬先生お忙しい中ご案内下さり有難うございました。

大倉陶園本社工場を訪ねて

＊上写真　大倉陶園を代表するブルーローズ岡染の皿

本社工場　駐車場より

エンボス加工した皿

新型コロナウィルス拡散防止策で、やまぼうし会も研修旅行等の行事が中止になりました。少数人数で近くの工房見学を計画し有志を募り神奈川県戸塚にある大倉陶園にお願いしたところ八名以下ならば対応できるとのことで、東戸塚駅に集合しタクシーで大倉陶園に向かった。大倉陶園は「良きが上にも良きものを」という理念に沿い 1919 年 (大正 8 年) 大倉孫兵衛・和親　父子により創立、1960 年 (昭和 35 年) に蒲田から現在地に移転、創立当時に目指したものづくりの精華を守り、皇室・赤坂迎賓館・京都迎賓館のご用食器を納めてきた。工場内は花壇が広く有り別荘地の様で「工場からして美術の工合に作り度き事」という言葉の様に整理整頓されている。原材料がある倉庫には長石、珪石、カオリンが積まれ練土、泥漿になるのを待っていた。今回成形部分は見学できなかったが説明によるとロクロ成形 (ローラーマシン)、鋳込み成形で素地を作っているとのこと。隣の棟は焼成室、扉を開けると既に暖かい、トンネル窯 (長さ約 36m) が可動して中ほどでは通路にいても熱いくらいだ。素焼きは 880℃で焼成後施釉、本焼き焼成は 1460℃という高温で白磁が完成する。

検査室では、ピンホール、歪み等一つ一つ検査員が慎重に検査していた。見本で検査前と検査後の製品は、その不具合箇所を観てもわからないほどでした。

絵付室では手描きで繊細な日本画の技法で絵師たちが一心に描いている。その他に岡染・本焼きした白生地にコバルト絵具で絵付けし 1460℃で再び焼成。エンボス (連続模様を刻印する技法)。漆蒔 (漆を器の表面に塗りその上に絵の具を蒔き丹念に染み込ませる) 技法等、これらの技法で仕上げられた製品をギャラリーで見ることができた。

コロナ禍のなか丁寧な説明ご案内ありがとうございました。

トンネル窯　36.7m

新　会　員　紹　介

会員番号　2014175　　佐藤　敏夫

作陶は伝統的な唐津、信楽、美濃系などの古典的な作品を中心に40年ほどになります。それでも陶芸は奥か深く、まだまだ知らない技法や新しいテクニックを学びたいと思い、芸大の先生方ともつながりも深い「やまぼうし会」へ参加させていただきました。
また、皆様と新たな陶芸ライフを楽しめれば幸いです。
よろしく願いいたします。

会員番号　2014177　　孫 語 崎

時間的な余裕が生まれ、去年湯島で「やまぼうし会」のみんなと会ったが縁で入会しました。
陶芸のもの時々制作していていますが、これからまた好きな作品を制作したいと思います。どうぞ宜しくお願いたします。

トピックス

東京藝術大学陶芸研究室
　　新任　三上　亮　教授
　　新任　椎名　勇　准教授
令和3年度より教員表記が変わりました
　茂田真央　テクニカルインストラクター
　高岡太郎　テクニカルインストラクター
　岩渕真里　テクニカルインストラクター

2021年イベント予定
「やまぼうし会作品展」
　　於：文京シビックアートセンター
　　2021年9月22日～27日

「杜窯会作陶展」
　　於：日本橋三越本店
　　2021年8月25日～31日

会員募集中！ご希望の方はホームページから
www.jsca-tua.jp　お申し込み下さい

瑞玉ギャラリー

取扱作家
豊福　誠、三上　亮
上田哲也、望月　集
丹澤裕子、林　妙子
深谷　泰、百田　輝
平井雅子、今井一美
椎名　勇、長谷川奈津
髙岡太郎、小林佐和子　他

使い込むごとに魅力が増す日常の作家ものの工芸品を扱っております。

〒173-0004
東京都板橋区板橋 2-45-11
TEL 03(3961)8984
常設時は日曜・水曜・祭日定休
展覧会会期中は無休
10:00～18:00
展覧会翌週の月曜日は臨時休業
http://www.suigyoku.com/gallery.html

九谷絵具・陶芸材料・上絵付筆

千園堂

〒923-1112
石川県能美市佐野町イ1-5番地
TEL 0761-58-5711
FAX 0761-58-5677

大倉陶園

良きが上にも良きものを

2019年、大倉陶園は創立100周年を迎えました。

■本社店
〒245-0052
神奈川県横浜市戸塚区秋葉町20番地
TEL：045-812-8588
営業時間　10：00～17：00（土日休・祝不定休）

■帝国ホテル店
〒100-0011
東京都千代田区内幸町1-1-1（帝国ホテル地下アーケード）
TEL：03-3503-6020
営業時間　10：00～19：00（日曜・祝日～18：00）

利便性・機能性の両立

シンリュウは電気窯・灯油窯・ガス窯・薪併用窯・穴窯・登り窯をお客様のニーズにあわせて設計制作しております。

前扉式電気窯　MKF-10型

粘土・釉薬。小道具多数ご用意！

- 初めて窯を購入される方にも安心な簡単操作と省エネ設計。
- 酸化・還元が自由自在（RFタイプ）。
- 全自動焼成装置（MRマイコン）付。
- 焼成パターンが入力済、さらに新規パターンも追加可能です。
- スタート時間の予約もできます。

最新高性能マイコン
簡単操作でありとあらゆる
焼成パターンを設定可能。

カタログ
無料配布中！

シンリュウ　検索

シンリュウ株式会社
本　社
〒351-0001　埼玉県朝霞市上内間木514－2
TEL.048(456)2123　FAX.048(456)2900
E-mail　info@shinryu.co.jp
URL　http://www.shinryu.co.jp

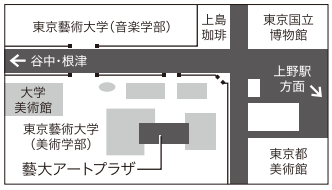
神奈川支店　TEL.046(295)1641　FAX.046(295)1624
北関東支店　TEL.0296(72)9950　FAX.0296(72)9952
東北支店　TEL.022(288)2651　FAX.022(288)2652
信楽支店　TEL.0748(82)4166　FAX.0748(82)4169

☆「陶芸総合カタログ」全128ページ・フルカラーを無料配布しています。ご請求は本社、各支店にお願いいたします。☆オンラインショップもご利用ください。

東京藝術大学 × 小学館
藝大アートプラザ共同運営事業
～藝大出島プロジェクト～

藝大アートプラザ

藝大の学生、先生、卒業生の作品が
展示され、購入できる場所です。
学内での研鑽の成果を、社会に、世界に
届ける賑わいの「出島」です。



artplaza.geidai.ac.jp

〒110-8714
東京都台東区上野公園12-8
TEL050-5525-2102

営業時間　11:00～18:00（変更する場合があります）
休業日　　月曜日（祝日の場合は営業し翌平日休業）、展示替え日ほか

編集後記

地球全体を覆うほどの感染症がはびこり、全世界の人々の日常生活が一変して１年半余り。
会の活動もままならない状態の中、なんとか編集会議の開催にこぎつけてみると、ページ割り振りや掲載写真の選択など、侃々諤々と意見を戦わし、終了予定時刻の超過もしばしばでした。
やまぼうし４号を刊行できました事は一重に関係者の皆様のお力添えの賜物と、編集委員一同深く感謝しております。
今後とも充実した機関誌作成を目指してまいりますが、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

編集委員　赤坂延子・大熊敏幸・落合博子・高野静絵・竹村光子・鳴島淳子・宮沢恵美子・茂貫浩子
発行年月日　2021 年４月
発行責任者：落合卓四郎
揮　毫：島田文雄　名誉教授
表紙作品：豊福　誠　教授　裏表紙：三上　亮　准教授
（教員表記は令和二年度時）

http://www.jscs-tua.jp Fax 03-4243-3422
© 陶磁研究やまぼうし会 2018